

## 手ごたえあり！ハタハタ共同操業

秋田県漁業協同組合 南部総括支所

金浦町ハタハタ共同建網組合 会長 佐々木 鉄也

### 1 地域の概要

秋田県の南西部にある金浦町は日本海に面し、隣接する仁賀保町、象潟町とともに県内では比較的温暖な地域である（図 1）。人口は約 5,000 人、戸数約 1,600 戸で、水産業はもとより電子機器部品を主体とした製造業も盛んな町である。

また、古くから漁業関係者が、海上での安全と大漁を祈願するため、毎年 2 月 4 日に 10kg を超える大鱈を何本も神前に奉納する「掛魚まつり」が行われる町としても知られている。

さらには、日本探検史上、偉大な足跡を残した南極探検家「白瀬轟中尉」の故郷としても有名である。

### 2 漁業の概要

私たちのグループが所属する秋田県漁協南部総括支所は、組合員数 95 人（正組合員 85 人、准組合員 10 人）で構成され、底びき網、小型定置網、さし網、一本釣り、夏季間のアワビやイワガキなどを対象とした潜水漁業と多種多様な漁業に従事している。

平成 15 年度の南部総括支所での全漁獲量は 1,257 トンで、漁獲金額は 5.2 億円となっている。このうち産卵のために沿岸に接岸する季節ハタハタを対象としたハタハタ小型定置網漁業は、漁獲量 173 トン、漁獲金額 44 百万円であり、それぞれ全体の 13.8 %、8.5 %を占めている（図 2、図 3）。

### 3 研究集団の組織及び運営

私たちのグループは、共同操業によって資源管理型漁業の推進、安全操業及び経営の安定化を図ることを目的にして、平成 13 年 9 月に結成された。

会員数 22 人からなる組織で、会長、副会長が各 1 人、会計 3 人の役員を軸として運営されている。

### 4 研究・実践活動課題選定の動機

直接外海に面した当地区では、北西の季節風が強い冬季間は出漁日数が極端に減り漁業経営上極めて厳しい状況となっていた。特にごく沿岸での季節ハタハタ漁では、しけにもかかわらず無理に出漁し、その上時間が限られることから、危険であり、割に合わないことが多かった。

平成 4 年から 3 年間にわたる全面禁漁の解禁にあたり、当地区で季節ハタハタを対象に操業できるのは、定置網と刺し網の兼業が 3 経営体、刺し網専業が 3 経営体と取り決

められた。解禁初年の平成7年は、全県漁獲可能量170トンに対して、現在の南部総括支所管内の可能量5トンとする取り決めをし、実際の漁獲量も1.6トンであったことから、一連の作業量もそれほど負担となるものではなかった。また、6経営体の間で漁獲量、漁獲金額ともにほとんど差はなかった。

しかし、その後、ハタハタの漁獲量は年を追って増加し、当地区でも平成12年には26トンにまで達した。この間、刺し網に従事していた漁師仲間からは、「その都度、投網と揚網作業を行わなければならない、高齢者では肉体的にも負担が大きい。」「網から魚体はずすには労力と時間がかかる。」、さらに、「網からはずす際、もっとも高値が付くはずのメスのハタハタからブリコ（卵）が飛び出して値が付かない。」「しけが来る度に網が壊れて、何枚あっても足りない。」などの苦労話を耳にすることが多くなり、定置網での操業について相談を持ちかけられるようになってきた。また、実際に刺し網専業と定置網兼業経営体の間には、漁獲量と金額に少しずつ開きが出てきていた。

## 5 研究・実践活動状況及び効果

そこで、現在の秋田県漁協南部総括支所へ話しを持ち込み、職員の指導・助言のもと、季節ハタハタ漁に従事していた全員が集まり「冬季間の経営の安定化」を第一に話し合った。様々な意見が出されたが、「効率の良い小型定置網を共同で操業すれば、今まで以上にハタハタの資源管理意識の向上が期待されるほか、安全な操業にもつながる。」、そして、なによりも「仲間全員で厳しい冬季間を乗り越えられる。」のではないかと考えた。

その後、数回の話し合いの末、平成13年9月に「金浦町ハタハタ共同建網組合」が誕生した。それからの季節ハタハタ漁（例年12月上旬～下旬）は、動力船（10トン未満）2隻、船外機船4隻を持ち寄り、5カ統の小型定置網をすべて22人の会員が共同で操業し現在に至っている（図4）。

### （1）操業と出荷の方法

共同操業を開始した平成13年には、昼夜に関係なく操業していたが、高齢者への負担やさらなる安全性の向上を考え、翌年から日中だけの操業に転換した。

漁場がごく沿岸であるため出漁から帰港までは1時間ほどである。帰港し荷揚げした後は、ブリコを持った雌（大・小）、雄（大・小）と細かく選別した上で、さらに計量した後、下氷を敷いた魚箱（発泡スチロール）に箱詰めして出荷している。出荷量は多い日になると3,000～4,000箱に達する。荷揚げなど一連の作業で特に力を必要とする場面には、若い漁師が率先して従事している。

### （2）水揚げ金の配分

水揚げ金は漁具などの必要経費を除いた後に、「仲間全員の経営の安定化」のため、すべての会員に均等に配分している。

### (3) 漁具の管理

グループ結成当初に不足していた定置網の製作費だけは、刺し網専業経営体独自の拠出によったが、それ以降の必要経費はすべて会の管理としている。また、漁期前の漁具準備や修繕作業もすべて全員共同で行っている。

### (4) 成果

ともすれば競合し一層の経営悪化を招きかねない業種の転換と受け入れではなく、共同という組織としたことで、刺し網専業であった漁業者は資材費が軽減され、定置網兼業漁業者は統数と人員が増えたことで、以前に比べてはるかに効率的で安全な操業ができるようになった。

また、特に重労働で時間を要した荷揚げや選別作業が大人数で行えるようになり、出荷量の多い時でも、夕方までには全員が帰宅できるようになった。さらに、操業時間が一定となったことで、ホタテガイ養殖籠を利用した漂着ブリコのふ化増殖事業も全員が一丸となって取り組めるようになってきた。

当然のことながら、当初は共同以前に比べて収入が少しばかり減少した会員もいたが、水揚げの増加に伴って、その格差も許容できるものとなってきた。なにより、地区の仲間全員の連帯により全員の経営が安定し、家族とゆっくり新年を迎えることができるようになってきたことは、なにものにも変え難い。

## 6 波及効果

毎年 12 月の短い期間ではあるものの、共同で操業していることによって、ハタハタ漁期以外や日常生活においても、今まで以上に協力意識が高まってきている。

日中だけの網起しにもかかわらず十分な水揚げを示すことができたことで、他地区の小形定置網漁業者にもこのような操業形態が波及し、安全操業の面でも大きな効果があったと考えている。

## 7 今後の課題や計画と問題点

他地区の定置網では、一昼夜、網起ししないと入網したハタハタが網地にブリコを生みつけるため、網なりが悪くなり漁獲できない事例がある。幸い本地区で同様の現象はみられていないが、対策を検討しておきたい。

また、グループ員の年齢構成は、24 歳から最高齢は 77 歳で、このうち 60 歳以上が 11 人と半数を占める。従って、高齢者への負担軽減を考え、船上での魚の取揚げや荷揚げ作業時の機械導入など、より一層の省力化と同時に、若手の後継者が安心して着業できる態勢づくりに努めていきたい。

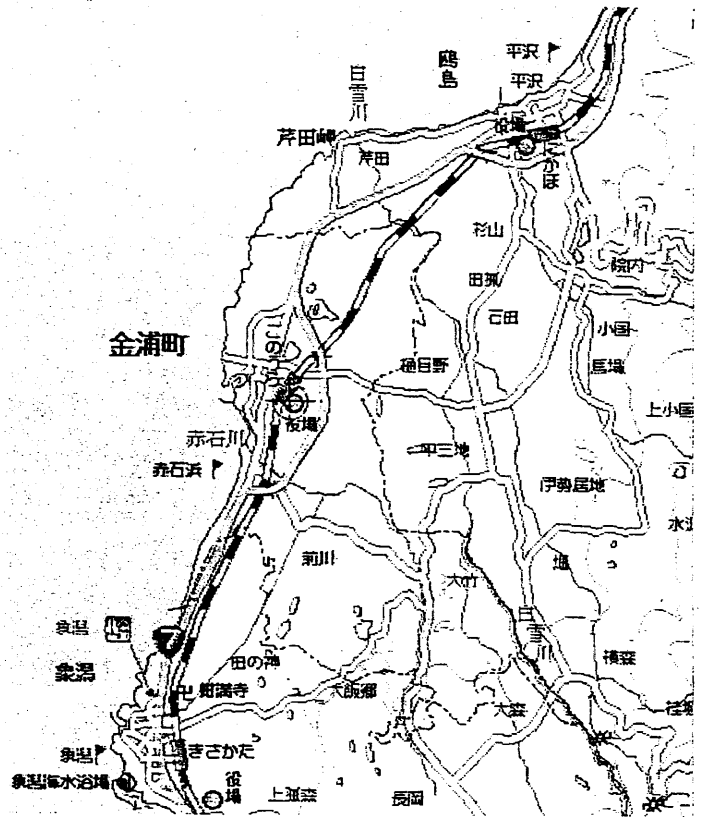
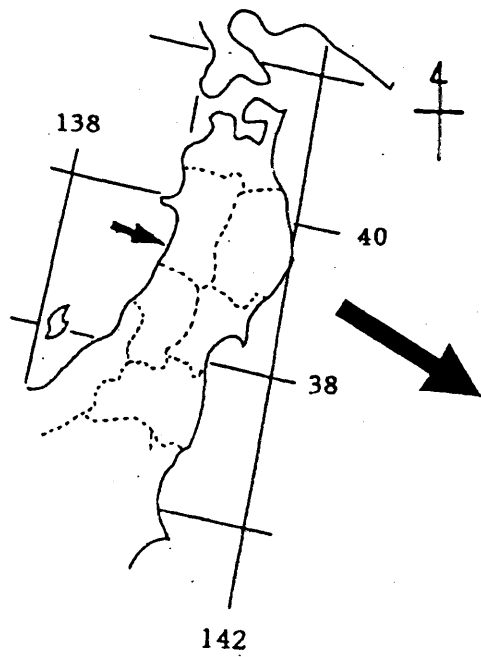


図1 金浦町の位置



掛魚祭 (毎年2月4日)

白瀬中尉の故郷



金浦町の紹介

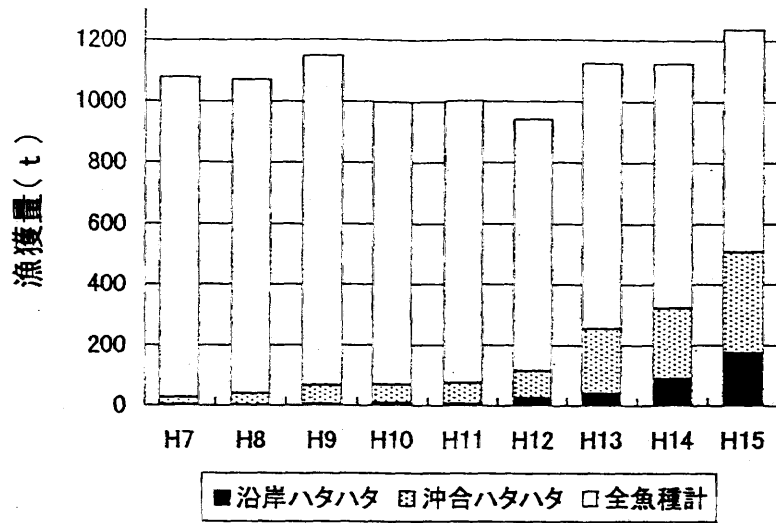


図2 秋田県漁協南部総括支所における漁獲量

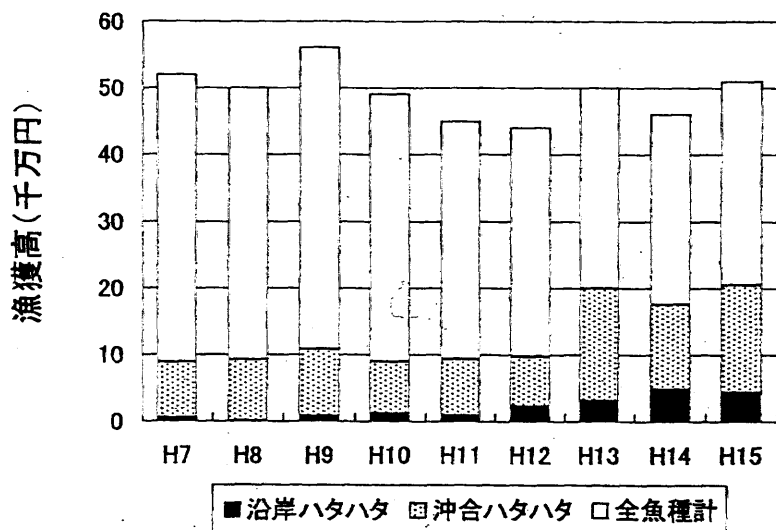


図3 秋田県漁協南部総括支所における漁獲金額

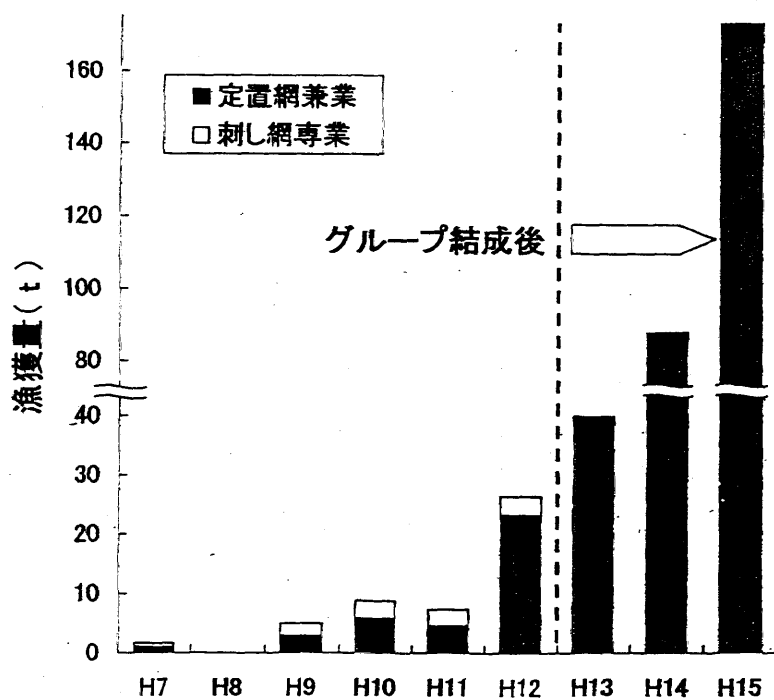
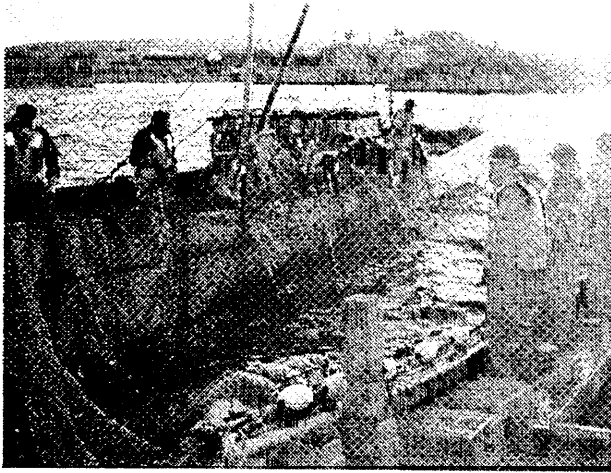
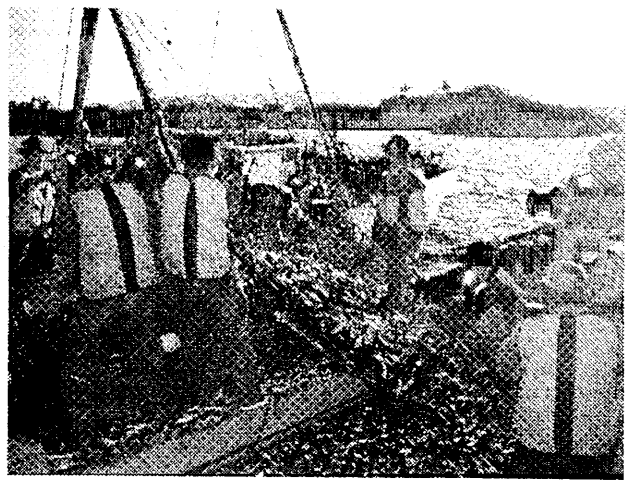


図4 グループ結成後の漁獲量



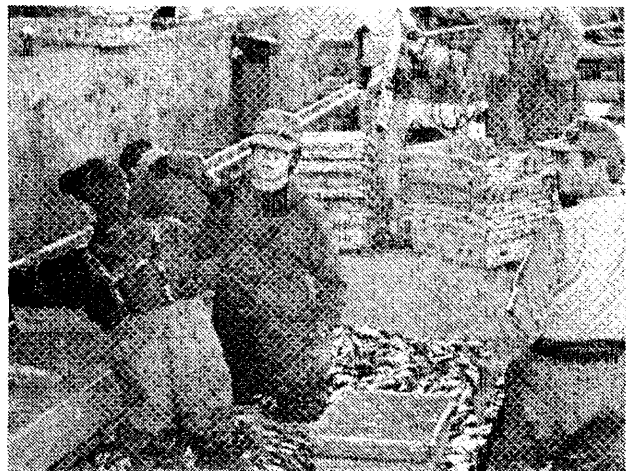
ハタハタ定置網操業



ハタハタの取り揚げ



ハタハタ荷揚げ



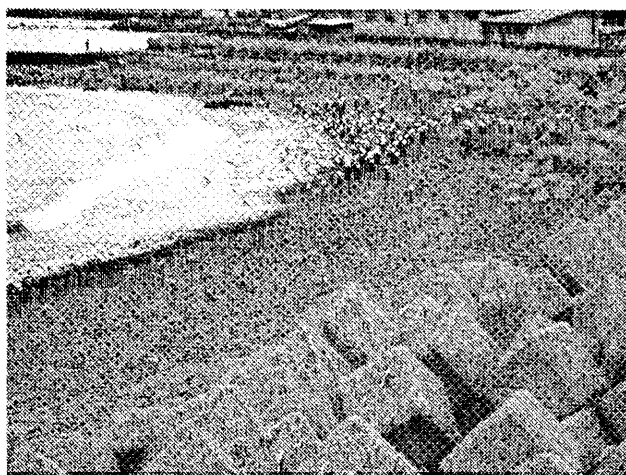
ハタハタ荷揚げ



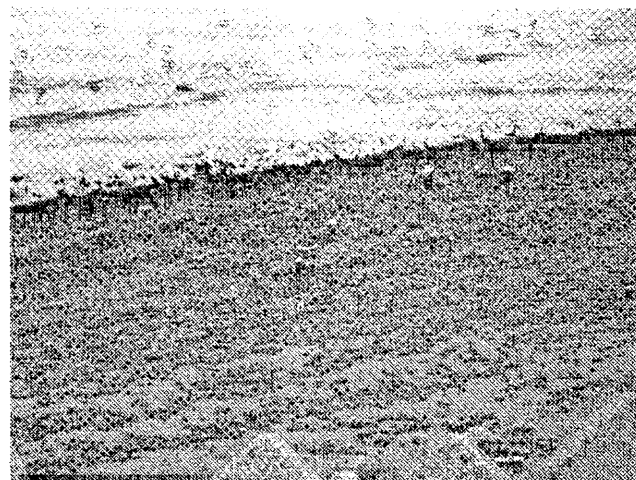
刺し網作業（共同操業前）



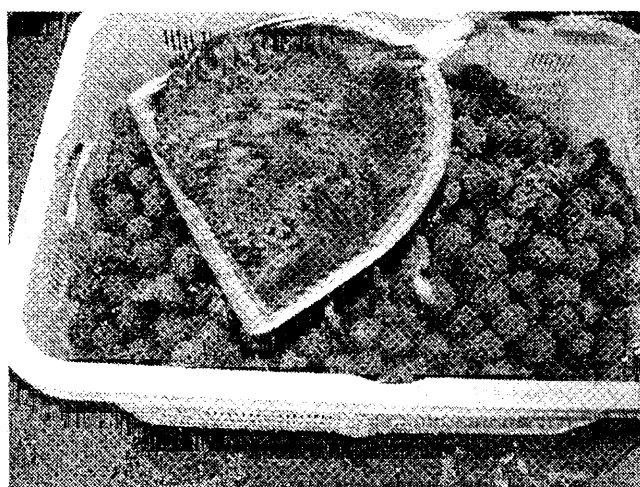
共同選別作業



打ち上げブリコ (ハタハタ卵塊)



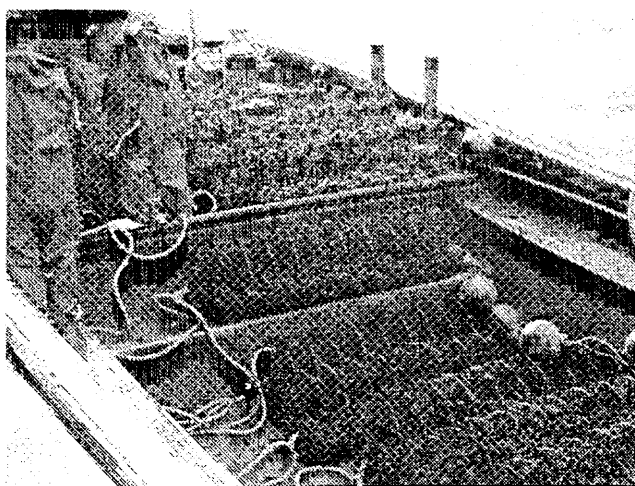
打ち上げブリコ



打ち上げブリコ回収



ホタテ養殖籠への収容



ブリコの垂下作業



ブリコの垂下作業